

人工言語学研究会著 2006 年秋初版 2011 年 7 月 5 日第二版

人工言語の術語

人工言語の定義と類義語、およびその範疇と分類について

●人工言語の定義

『言語学大辞典第6巻』の「自然言語と人工言語」の定義によれば、自然言語は「人間の各集団の間に自然発生的に形成されたもの」とあり、人工言語は「自然言語のもつ曖昧性(ambiguity)をとり除き、ある分野に限定して、その分野での必要と使用目的に合うように人工的に設計した言語」とある。

この定義に従うと国際補助語や芸術言語のみならず数学用に作られた言語やプログラム言語も人工言語に含まれることになる。具体的にはエスペラントやアルカだけでなくBASIC やC 言語も人工言語に勘定される。

しかしこの定義には疑問の余地がある。人工言語は自然言語のもつ曖昧性を取り除いたものとするが、この定義だと自然主義人工言語を人工言語に含めることができない。また、特に必要性や目的意識のない人工言語も除外されてしまう。自然言語を「人間の各集団の間に自然発生的に形成されたもの」と定義するのに異論はないが、人工言語については「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された言語」と定義するほうが網羅的であろう。この定義だと自然主義人工言語や、特に必要性や目的意識のない人工言語も含めることができる。

●人工言語の類義語

人工言語の類義語は複数存在する。以下に例を挙げる。

- 1:人工語
- 2:計画言語
- 3:架空言語
- 4:創作言語

1は『言語学大辞典』などが採用している。やや古いイメージがあり、2011年現在ではあまり使われない。そもそも言語学では一般に自然語という術語は使わず自然言語という術語を使う。従ってその対語は人工語でなく人工言語が適切であろう。

2は人工言語が計画的に作られる側面を強調している。ただし「言語案でしかなく実際

には使われない」という暗示を感じてこの術語を避ける者もある。

3 や 4 は芸術言語に分類される言語の制作者が用いることがある。また、単に人工言語という術語を知らずに人工言語に相当するものがないかとインターネット検索をする人間が、3 や 4 を暫定的に打ち込むことがある。これは人工言語に関するホームページのアクセス解析を通じて得た情報である。

●英語における人工言語の類義語

1:constructed language

2:conlang

3:artificial language

4:planned language

最も一般的な英訳は1とその略語の2である。なお、人工言語の制作者は conlanger と呼ばれる。

3 は直訳すると最も人工言語に近いが、欧米圏では1や2の方が一般的である。4 は計画言語に当たる。

●自然言語

人工言語と異なり、自然言語は類義語が豊富でない。自然言語ではほぼ統一されている。英訳は natural language (natlang) である。

●人工言語の範疇

人工言語を「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された言語」と定義した場合、その条件に適合するものは全て範疇となる。

ここでいう言語は典型的には人間のコミュニケーションに用いられる音声を伴ったものであるが、手話のように音声を伴わないものやプログラム言語のように人間のコミュニケーションに用いないものも含んだ広義の意味で定義される。

人工言語と自然言語は対極の位置にあるが、その中間的存在がある。それはピジンやクレオールである。

ピジンとは例えば商港の英語話者と中国語話者の間などで発生する。中国語話者が意思疎通を図るために英語を簡略化し、商業用として実用する。それがピジンイングリッシュである。ピジンイングリッシュは英語を簡略化したものなので自然言語である。しかし元の英語に比べると人工言語に近い性質を持っている。

ピジンイングリッシュは通常、文法が複雑な構造を持たないように変えられる。こうしたことは英語母語話者間では起こらないことで、かなり人為的に言語が変えられているといえる。この点においてピジンは人工言語に近いといえる。

しかし商人らは人工言語を作ろうと思って意図的に言語を簡略化したのではない。ピジンイングリッシュは商業上の必要性から自然に発生したものである。ゆえに人工言語ではない。よってピジンは人工言語と自然言語の中間に位置するといえる。

なお、その土地の子供たちがピジンを母語として習得すると、ピジンはクレオールと呼ばれるようになる。本質的にピジンと同じであるため、クレオールも人工言語と自然言語の中間に位置する。

このように、人工言語と自然言語の間にはピジンやクレオールが存在する。これらは自然言語よりは人工的であるが、人工言語の範疇には含まれない。

なお、暗号については人工言語に含める立場と含めない立場があるが、上で定義した要件を満たすため、本研究会は暗号を人工言語に含める。

仮に日本語の文字を特定の置換規則によって変換しただけのものであろうと、その置換規則自体が意図的かつ人工的である。

●人工言語の分類

a priori language, a priori conlang : アプリオリ言語、先験語。既存の言語から語彙や文法や音韻論といったあらゆる言語的要素を流用しない言語のこと。アポステリオリに比べて制作に労力がかかる。アルカなど。

a posteriori language, a posteriori conlang : アポステリオリ言語、後験語。既存の言語から語彙

や文法や音韻論といった言語的要素を一部ないし全部流用する言語のこと。エスペラントなど。

international auxiliary language, auxiliary language (auxlang) : 国際補助語。エスペラントなど。

artistic language (artlang) : 芸術言語。アルカなど。以下の内訳がある。

--personal language, hermetic language : 個人言語。主に自分にしか分からない秘密の暗号などとして用いられる言語。ビンゲンのヒルデガルトによる Lingua Ignota (未知なる言語) など。

--fictional language : 架空言語 : 広義には人工言語の類義語で、狭義には芸術言語の内訳である。トールキンの中つ国の言語など。

--alternative language(altlang) : 代替言語。もし歴史が異なっていたら言語がどう変化していたかを考察したもの。本質的にアポステリオリ言語である。

--jokelang : 冗談言語。その名のとおり余興として作られる言語。しばしば言語学的に見て不自然な性質を持つ。

engineered language (engelang) : 工学言語。実験的に作られる言語。以下の内訳がある。

--philosophical language : 哲学的言語。フランシス＝ロドウィックの『共通の文字』など。

--taxonomic language : 分類学的言語。哲学的言語とほぼ同義。概念を図書分類法のように分岐させていく側面を強調している。ジョン＝ウィルキンス『真性の文字と哲学的言語にむけての試論』など。

--experimental language : 実験的言語。ある構造を持った言語が機能するかどうか確かめるために試験的に作られる言語を指す。

--ideal language : 理想言語。普遍言語とともに主に 16-18 世紀にヨーロッパで起こった人工言語の論争の中で用いられる術語。

--logical language(loglang) : 論理的言語。工学言語の持つ論理的な側面を強調した術語。人工言語史的には下記の programming language の端緒となった。

--programming language : プログラミング言語、プログラム言語。コンピュータを扱う際に用いられる言語。BASIC, C, FORTRAN など。

naturalistic language, naturalistic constructed language, naturalistic conlang : 自然主義人工言語。自然言語との混同に注意。自然言語と見紛うような人工言語のこと。しばしば制作者に言語学や語学の知識が要求され、制作に労力がかかる。

-naturalistic artlang : 自然主義芸術言語。芸術言語のうち、自然言語に似せたもの。アルカなど。

●ドゥリンチェコによる分類

『言語学大辞典』の「人工語」によれば、ドゥリンチェコは人工言語を次のように分類した。

先験語——哲学的言語

後験語——図式派：エスペラントなど

自然派：インテルリングワなど

同辞典によると先験語すなわち哲学的言語とは「人間がもっている論理は人類全てに共通であるからこれを基盤として言語を構築すれば コミュニケーションの手段として機能を発揮しうるという発想から生まれてきた言語案」である。先験語は16-18世紀を中心に、ベーコン、デカルト、ライプニッツらによって考察されてきた。なお、本論では先験語と哲学的言語は同義ではない。これはあくまで辞典による分類である。

対して後験語は先験語に少し遅れて発達し、19世紀にザメンホフによるエスペラントの台頭で一世を風靡した。図式派とは自然言語の持つ不規則性や例外を排したものである。対して自然派とは自然言語の持つ不規則性や例外を多少認めたものである。

ドゥリンチェコの分類は全ての人工言語を分類しきれないという欠点を持っているが、先験語と後験語に人工言語を大別した点は有益である。人工言語を先験語と後験語に分けた上で自然言語と対比すると、人工言語と自然言語はデジタルな違いではなくその間に異物の存在を許すアナログなものであることが分かる。

後験語は自然言語を基盤とした言語で、図式派も自然派もそれは共通する。図式派は言語の持つ不規則性や例外を認めないが、自然派はそれらを認める。従って上記の図で最も

自然言語から遠いのは先験語であり、最も自然言語に近いのは自然派である。

同じ人工言語でも後験語のほうが先験語より自然言語に近い。更に同じ後験語でも自然派のほうが図式派より自然言語に近い。ゆえに人工言語と自然言語の間にはより人工言語らしいものより自然言語らしいものがあるといえる。ただし先験語でも自然主義人工言語の場合は自然言語に近い性質を持っている。

●人工世界

人工世界は constructed world (conworld) と呼ばれるもので、「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された世界」と定義できる。

内訳には人工文化(constructed culture, conculture)、人工風土(constructed climate, conclimate)がある。

人工世界にもアプリアリとアポステリアリがある。例えば人工言語アルカが使われる人工世界カルディアは前者の好例である。

●人工言語は必ず世界を背景に持つ

言語は文化や風土から影響を受ける。例えば日本語で稲と米は単語レベルで区別されるが、英語ではどちらも rice である。これは日本人が米を主食とするからであるが、その原因は日本の風土にある。

このように言語は文化や風土から影響を受けるため、人工言語を作る際は背景となる世界についても考察する必要がある。

既存の世界を流用した場合、その人工言語はアポステリアリ人工世界を持つ。ゼロから世界を構築した場合、その人工言語はアプリアリ人工世界を持つ。

なお、既存の世界をそのまま用いた場合は人工世界とは言わない。現実世界である。例えばフランスを舞台にした人工言語を作った場合、その人工言語は人工世界を持たない。

従って人工言語は人工世界と現実世界のいずれかを背景に持つといえる。

●最も制作が難しい人工言語

以上の分類から、最も労力を必要とし制作者に広範な知識が要求されるものは、アプリアリ人工世界を持ったアプリアリ自然主義人工言語である。

この類型は言語と世界をゼロから作らねばならず、かつ既存の言語や世界から要素を流用することが許されない。この類型の好例は人工言語アルカと人工世界カルディアである。

アプリアリ人工世界を持ったアプリアリ自然主義人工言語はその制作の難しさから人類が成しえてこなかったものであり、人工言語アルカが史上初のものである。

厳密に言えばアプリアリ人工世界を持ったアプリアリ自然主義人工言語をたった1語でも作れば同じ類型を作ったことにはなる。そこで問題となるのはその規模すなわち作り込みの深さである。

アルカの場合は2011年現在で単語帳形式でない辞書があり、語彙は15000語を超える。教材も豊富で、文法も細部に到るまで作り込まれている。音韻論はもちろんのこと、音声学も定められており、発声法や息の使い方についてまで言及されている。我が国のインターネット検索における知名度も申し分ない。また、制作開始は1991年で、少なからず作業歴がある。